

大阪のビジネスを熱くする

大阪市の中小企業情報紙  
大阪産業創造館  
<http://www.sansokan.jp/>

2007.02  
FEBRUARY  
VOL. 73

b platz press ビープラッツプレス

# 会社変革の とき

世代交代  
特集

銀行勤めを経て義父が経営する中村製紐に入社し、2002年に会社を引き継いだ光成氏。製造業の中国シフトによる厳しい現実の中、会社存続のためには新市場への参入しかないと考え、これまでとは違うターゲットに打ち出す新規事業を立ち上げようと決意した。急激な社内の変化に困惑し辞めていく社員も出る中、今年1月、小ロットでもファッション副資材が購入できる若手デザイナーを対象にしたショールーム「TO-GATHER」をオープン。「先代は人を動かし物事を進めるタイプなのに対して、主人はとにかく自分で前に進まない気が済まないタイプ。以前は思い通りに動いてくれない社員にきつくあたっていたこともあったようですが、今では「あ〜また言い過ぎた…」と反省し、聞く耳を持つと努力しているみたいです(笑)」と妻の純子さんは分析する。「どこまでいけるかはまったくの未知数。でもやってみなければ何も始まらない。走りながら考えます」と、二代目社長はどこまでも前向きだ。

中村製紐株式会社

(ショップ「TO-GATHER」にて)

<http://www.to-gather.com/>

TEL 06-6533-1300

代表取締役 光成 和晃氏(写真左)  
純子氏(写真右)





株式会社天彦産業  
<http://www.tenhiko.co.jp/>  
 TEL 06-6613-2361

代表取締役社長  
**樋口 友夫** 氏

賞与は今も現金で手渡し、一人ひとりに宛てた手紙を入れる。社員や家族からの返事もある。「社員を想う気持ちが私からの一方通行でなく、往復運動になってきた」と喜ぶ。



## 個人の幸せを追求する 人間力経営への転換

鋸製造業からスタートした天彦産業は、132年の歴史を誇る老舗の特殊鋼卸業者、5年前に外部工場で加工品を製造する部門を立ち上げ、2年前にはタイに初の海外拠点を設けた。「変革が続けられるのは早くから社員教育に力を入れてきたからこそ、社員が幸せを感じてこそ会社は成長できる」と、五代目社長の樋口氏は人間力重視の経営をさらに進化させ、社風・企業文化の構築に挑戦し続けている。

鋸製造から戦後、特殊鋼材の流通業へと業態転換を図った天彦産業は、日本経済の発展とともにその企業規模を拡大してきた。だが、業界は今、大きな変化に直面している。「川上の鉄鋼業界で大きな再編が進み、川下のメーカーからは流通コストの削減を求められる中、流通業者の果たす役割が問われている」と樋口氏。ファブレスメーカーとして加工品の開発・製造をスタートさせたのも、そうした危機感からだ。多くの企業と取り引きしている強みを活かし、得意先メーカーの求めに応じた最適な加工品を開発している。

専務だった同氏が兄からバトンを渡されたのは2年前。加工品開発の延長としてまずタイに事務所を設け、さらに上海にも進出を検討するなど、海外戦略を加速中。「日本企業向けにもものづくりや材料をプロデュースできる」とにらみ、3カ年計画で加工品を売上げの50%にまで増やす計画だ。

同氏が、先代の偉大さを感じるのには、社員が10数人だった30年前から社員教育に力を入れてきた点だ。「その土台のうえにスタートできるのはありがたいこと」という。そして今年度の経営方針では、会社の幸福よりも、まず社員やその家族の幸福を追求することを掲げた。

「顧客第一主義を唱えても、それを実行する社員が会社を愛せないことにはお客様を大切にはできません。突き詰めれば、自分が幸せでなければ、会社も愛せないのです」。そこで着目したのがずっと続いている体力づくりや自己啓発などに取り組む独自の委員会活動。「新人は仕事ですぐに貢献できないかもしれませんが、毎日、一生懸命ジョギングする姿で他の社員の心を打つことはできます」。最近では、フット

サルチームを新たにつくった社員を社内表彰した。「社内を活性化することは、売上げを上げることには匹敵するから」だ。委員会活動を評価対象に加える新たな人事評価制度も3月からスタートさせる。

社長の就任時、歴史の重みにさらされ、1週間眠れない日が続いた。妻に「今の専務はだれ?」と聞かれ、自分の右腕が不在だったことに気付く、すぐにNo.2候補を指名して楽になった。「社長の後継ぎだけでなく、空いたポストの後任をつくることも大切。自分の能力だけで会社は続かないことを自覚すれば、社員の大切さが増すますわかるはずです」。重圧の中でひしひしと感じることだ。